

井深八重

阿部志郎

(横須賀基督教文化会館館長)

戦後、一九四八年の夏のこと。

静岡県御殿場で開かれた学生YMCA
夏期学校に参加しての帰途、近くの神山
村にある「復生の園」(カトリックのハン
セン病療養所)の訪問を、ふと思いつ
た。正直に言えば、ハンセン病に悩む人
を慰めるという殊勝な心掛けからではな
い。恥ずかしいが、私はそれまで、一つ
として社会福祉施設を訪れたことさえな
い。復生病院見学の動機は、秀れた哲学・
神学者でありながら、ハンセン病者に尽
した岩下壮一神父が、命を終えた場所を
みたいと、思いついたからにすぎない。

著書を通じて、実践のなかで思索を深め
た岩下神父の思想的影響を受けていたか
らである。

病院の中を、畳敷の礼拝堂、手術室、
病棟と、案内された。清冽な川の流れ、
緑におおわれた土地とは対照的な、荒廃
した建物、この世の悲惨を身に帯びたハ
ンセン病者、吐き気を催す臭気に、私は
言葉につくせないショックを受けていた。
聖書に現れるハンセン病者の悲哀と苦悩
の世界が、凄惨なまでに、眼前に生々し
く展開されているではないか。できれば、
目をつぶって逃げ出したい衝動を辛うじ

て押えながら、治療室へと導かれた。

小さなテーブルを挟んで、一人の看護
婦と一人の患者とが向い合って椅子に坐
り、患者が左腕を差出して包帯交換をし
ているところであった。看護婦も患者も、
私をみて丁寧に目礼して下さった。患者
の耳も鼻もぶざまに崩れているのに、一
瞬胸をつかれた。私も黙って頭を下げた。
言葉で挨拶するのが躊躇されるほど、不
思議と暖かい静寂がその場を支配してい
た。二人がハミングで唄う聖歌の妙なる
音が、天使の声のようであったのと、患
者の澄んだ眼差しが、印象的であった。

看護婦に目を転じたとき、はっとさせられた。——美しい。柔和で穏やかな顔の輝きと、きびきびとひきしまったダイナミックな動作とのまことに麗しいコントラスト——。しばし、いきを吞む。そのとき、突如として、脳裏に聖書の一句がひらめいた。「これらのいと小さき者のひとりになしたるは、すなわちわれになしたるなり」(マタイ、二五—四〇)。何気なく読み過ぎてきた一節、特に、ひとりという言葉が、ずっしりとした重みをもつて、しかも、全く新しい意味をもつて、心の奥底にしみ透っていった。

軍隊から復員して大学に入り、私は経済学を専攻した。社会科学を学ぶ学生に、戦後の疲弊した社会、窮迫した国民生活が解決を求めて、厳しくのしかかっていた。社会を「集団」として把握する以外に人間に幸福をもたらす道はないと、いつの間にか思い込んでいた。一人の人間の価値が、どんなに小さく一人ではなにもできないことを、戦争体験を通して痛感させられた後だけに、私のなかで社会変革は、現実性を帯びていた。

思いがけない看護婦との出会い——それは私にとつて出会いとよぶにふさわしい——は、目からうろこがおちる内的経験であつた。その時の光景が、今でもまざまざと目に浮ぶ。しかし、私の内に何が起つたかを、その時点で明確に認識できたわけではない。今になって、この経験を辿るとすれば、おおよそ次のように説明されると思う。

パウロは、イエス・キリストをかしらとする信者の群れを有機体とみて、「私たち数が多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互に部分なのです」「各部分が互に配慮し合う」(ローマ十二・第一コリント十二)と述べる。中世時代には、人々はそれぞれの職に分れるが、社会は道德的意志的統一体であると考えられた。キリストの群れのように、社会も一つの体(コルプス)で、ここから社会連帯が芽生える。連帯とは、一つの体の中で、互いに支え合うことをいう。人間は一人、二人と数えられる個別的存在であると同時に、何物をもつても代えがたい神の像(ペルソナ)を

井深八重氏略歴

一八九七(明治三十)年

十月二十三日生まれ

一九一五(大正四)年

同志社女学校普通学部卒業

一九一八(大正七)年

同志社女学校専門学部英文科卒業

同志社卒業後、復生病院(癲院)

に看護婦、後看護婦長などとして

救癲事業に尽くす。救癲事業に対

する功績に対し、黄綬褒章、ロー

マ法皇から聖十字賞、さらにナイ

チンゲール賞を受賞。

一九七五(昭和五十)年

五月二日

同志社大学より名誉学位を贈られる。

一九八九(平成二)年

五月十五日 逝去

宿す人格体（ペルソナ）である。それは、一人の人間が全体のためになくてはならぬ存在であり、一人を失うと全体が傷つくほどの尊厳さをもつ。一人が全体のために生きるのではなく、一人そのものが全体であり、一人の中に全体が含まれている。人間は、目的的存在であり、如何なる場合にも手段化されてはならない。

私達はしばしば、人格そのものより、人間の属性を強調し、「権利」を主張する。人間が存在の原理を「自己」のうちに求める限り、「人間は人間に対して狼」という動物的な闘いの原則から脱け出せない。弱肉強食の集団では、「いと小さき者」は、排除される。それに対して、「これらの小さき者がひとりでも減びることは、あなたがたの父のみこころではない」（マタイ一八一―一四）は、人間的原理から発せられる言葉ではない。民主主義は、「九匹を野原に残して」「見失った一匹」を捜し求める神の原理（ルカ一五）を基盤にして、はじめて、成立するのではないか。「ひとり」の奥深くに限りない価値と可能性をみとめることこそ、社会の課題なのではないか。一人は九九人と不可分

で、「ひとり」の人格を重んずることなくして、真の「集団」は形成されない。コミュニティとは、人格と人格が支え合い、重荷を共に分かち合うこと。ひとりの幸せを確保できないで、どうして社会の幸福を実現することができようか。

一人の無名の看護婦によってもたらされた感動は、まさに、私にとって一種のインスピレーション（靈感）である。それは、実業界から社会福祉へと、志望転回を決意させる役割を果たすことになった。主への深い信頼が、看護婦と患者の間に交わりを生み、交わりが愛をよび出し、愛が生きる希望を与えているのである。だからこそ、「ひとり」と相対して、看護婦は、謙虚に、そして全人格的に、応答してやまないのに違いない。愛とは、一方から他方への働きかけではない。愛とは、他者への働きかけを通して、自己の実存が他者によって支えられ、自己と他者が共に生きる「交わり」を指すのではないか。

内から湧き起る深い欲びと希望に包まれた看護婦の顔の美しい輝きと、いきい

きと躍動する愛の業（わざ）とが織りなす見事な均衡と調和が、私を交わりへと招き、私の存在をゆすぶったように思えてならない。私も、この看護婦のように生きたいと。

私を福祉へと導いた看護婦が誰であるかがわかったのは、七年後のことになる。それが井深八重さん（以下敬称を略す）だった。井深さんとの出会いといっても、十五秒か二〇秒かの一瞬の間にすぎず、しかも、名前を知らず、言葉を交えたわけでもない。なのに、私にとって人生を左右する強烈な出会いとなったのだから、めぐり会いとは不思議なものだと思う。

それから三十五年を経て、井深八重と私は、テレビの前で向きあっていた。すでに名誉婦長になっていたが、病棟の一室に起居し、患者を励まし、ミサではハーモニウムの古いオルガンを奏した。足が不自由で山浦イツさんの世話を受けていたので、病院でのテレビ対談となった。

一時間番組の半ば近く、ディレクター



1975年5月2日、同志社大学から名誉学位を贈られる
(右から 松下幸之助氏、井深八重氏、清水安三氏、中村遙氏)

が「御本人の話を引き出して下さい」と記した紙を掲げて私に指示した。私は、内心ムカッとし、無視した。巧みに誘導しているのではないか。数分後、再びディレクターが同じ紙を両手で掲げる。今度は「御本人」の三字を赤で二重に囲んでいる。私も、やっと気付いた。立派な歴代院長を偲び、岩下院長の高邁な精神を懷しみ、安らかに、感謝して苦しみの生を終える患者の感動的な死を、井深は次から次へと語るのに本人の喜怒哀楽は物語られていない。質問を切り換えると、淡々と自分の感情を明かしてくれ、ほっとした。

この番組が放映されたのは、一九八三年十二月二十五日クリスマスマスの日曜日の朝。心満された思いを忘れることはできない。

井深は、人の徳を讃えて、己を語らぬ人だった。厳しく自己を規制し、病者も訪問客も、わけへだてなく、いつもニコニコと温かく包み込み、上品な言葉で接した。人に優しく自分に厳しいアスケーシス（自己抑制・禁欲）が、奉仕と喜びの人生を支えた。

「院長様はじめ皆様様

永い間このいたらぬ者をお優しくお心寛やかに、お世話頂き誠に厚く御礼申しあげます。

この御厚恩に対して何としてお報い申しあげる證もなく唯皆様様を天国にお迎え申しあげる日まで、皆様様の真のお幸せのためおいのりを続けさせて頂きます。

皆様ほんとうに有難うございました」

が遺言である。

「神様の待つておられるよいところに行くのですから喜んで下さい」と、言い遺し、一九八九年五月十五日夕に、井深八重は微笑を浮べて、安らかに九十三歳の生涯を閉じた。

そして、さきに召された六百の病者の墓地に、レゼー神父の墓と並んで、葬られた。

翌五月十六日は神山復生病院の百周年にあたる。その日を楽しみにしていたのに――。

しかし、そのため式典参加者が、遺体

に親しく別れを告げることができたのは、神様のお計らいではあるまいか。

井深八重は、一八九七年、井深彦三郎・テルの長女として、台湾で生まれたらしい。父親は、当時活躍した大陸運動家であった。台湾総督府の通訳をしていた時代と思われる。

彦三郎は、一時期、郷里会津で代議士にもなったが、家庭的には恵まれず、八重の母は家を去り、以来、八重は巡礼をしてでも生みの母に会いたがり、母親も、亡くなるまで八重を按じていたという証言もあるが、ついに母子は行き合うことがなかった。

井深八重は厳しい祖母の下で育ち、伯父・伯母に助けられた。

同志社女子専門学校（現同志社女子大学）英文科を卒業して、長崎の女学校の教壇に立ち夢多い新しい人生の道を歩み始める。

同志社で学んだ知性と愛徳の精神を、深く刻み込んだのは言うまでもない。

ところが、ある日、ライ（ハンセン病）との診断により、伯父・伯母に連れられ

て復生病院への橋を渡った。これが数奇な運命に見舞われる契機となる。

「通されたのは院長室でした。黒いスーダンに白髪温顔の外人は、初めて見るカトリックの司祭でした。……付添いの伯父・伯母との会話の中から、ここがライの病院であること、そして、私が何の為につれて来られたかを、初めて知った時の私の衝撃！ それは、到底何をもっても、表現することはできません」と、井深は記す。

井深は二十三才。ただ一人置き去られ、数日泣き明かした。「一生に流す涙を一週間で出しましたから、もう泣く涙をもつておりません」と、井深は笑いながら話したことがある。

突然いなくなった教師を慕う教息子からの手紙が束になって転送されてくるのに、返事をしたためることができない。社会から捨てられたうら若い女性の悲しみの深さがうかがい知られる。現在全治するハンセン病は、当時不治の天刑病として差別された時代なので、入院した日から「堀清子」と仮名に改めたのに象徴されるように、家族・社会から縁を絶ち、

文字通り隔離されたのである。

伯父とは、明治学院の初代日本人総理となつた会津人井深梶之助である。梶之助は、年齢が一年若く白虎隊に参加できなかったが、薩長への憤りにあふれ横浜に出る。ブラウン塾に学ぶうち「汝の敵を愛せよ」の聖書の言葉にとらえられて洗礼を受け、キリスト教徒となり国際的に活躍した人物であつた。

療養の一年が過ぎ、病気に疑いをもつたレゼー院長が皮膚科の権威土肥廉蔵博士の診断を仰ぎ、ハンセン病でないと判明した。

家に帰るように、もし日本に居たくないなら、フランスに留学させてあげよう、とレゼー神父にすめられたとき、井深が思いをはせたのは、悲惨な病者を見捨てるに忍びず「同僚の皆さんと交際できなくなる日がくるかもしれませんが、最後の恩典として、私の愛するライ患者と生死を共にするご許可をひたすらお願い申し上げます」と、公立ライ療養所が設立される二〇年も前一八八九年の復生病院開設を司教に嘆願したテストウイド神父

父のことだつた。さらに、母国を去り、貴族の地位を顧みず、日本で親も及ばぬ愛情を私達に注いでくれる年老いたレゼー神父を助けたいとの願いが、井深の心を占めた。

「もし許されるならば、ここにとどまつて働きたい」と申し出る。

短期間で資格のとれる看護婦を志し、資格試験に合格した日に、東京駅待合室で、片手に免許証、片手にレゼー師の好物のパンを抱えたまま、関東大震災に遭つた。

復生病院の初めての、そして、ただ一人の看護婦として勤務を始めてから、文字通り、病者と生死を共にして七〇年――。

不治の病に冒され、家族に去られ、地域で忌み嫌われれば、世をはかなみ、人をうらむのが常であろう。井深も、若い時、一度は死を選ぼうとしたと聞く。

その人が、ナイティンゲール賞、教皇より勲章、朝日社会福祉賞、宝冠章等を受け高く評価される人物に高められたことに注目したい。米国のタイム誌は、マザー・テレサに続く「日本の天使」と紹

介した（一九七五年）。

特に、同志社大学が名誉博士号を授与したのは特筆に値する。世の片隅で、黙々と人知れず看護に尽した人に、博士号を贈る大学が他にあらうか。悲劇的な苦しみを超えてハンセン病者の「天使」となつた一女性に最高の称号を授与したことは、とりもなおさず、同志社の榮譽といわなければならない。

井深は、晩年に同志社を訪ね旧友に会うのをなよりの楽しみにしたが、これらの名譽と稱賛を、人に伝えたことがない。ここに井深の慎しみがあがあるが、世間の評価よりもっと深いところで信仰に生かされたのであろう。

“Learn to Live and Live to Learn”
は、同志社のモットーと聞いたことがあるが、井深はまさにそれを実践した典型ではないか。

同志社に育てられ、「いと小さき者」への愛を貰った井深の人生、その生き方を学び、同じ交りに招かれている同志社人の上に、神の祝福あれ！